

特別賞 四谷ライオンズクラブ会長賞

題名 日本の「すみません」文化

林思沛（リンシペイ）台湾 早稲田大学

みなさん、こんにちは。本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。私は交換留学生として早稲田大学法務研究科に所属しておりますリンシペイと申します。昨年の9月に台湾から来ました。これからは日本のすみません文化というテーマについてスピーチさせていただきます。

日本人の友達に「すみません」と言われた驚きは未だに覚えています。その時、私は友達の手伝いをするところでした。母国語が中国語の私にとって、友達が「ありがとう」ではなく、「すみません」という返事だったことに驚いたのです。私の顔に浮かんだ戸惑いを友達は読めたらしく、今のは感謝の言葉だよと説明してくれました。それからというもの、「すみません」という言葉について、興味がわきました。

辞書を引いてみると、「すみません」とは、相手に謝るとき、礼をいうとき、依頼をするときなどに言う言葉です。いままで私は謝る場合にしか使えない言葉だと思っていましたが、感謝の気持ちも含まれると知ってすごく興味深く感じました。調べた後、もしかして日本人にとって、感謝と謝罪は表裏一体の関係にあるのではないかという仮説が思い浮かびました。

去年の九月に交換留学生として日本に来て以来、周りの日本人が日常生活で、「すみません」と一日に何度も使っていることがわかりました。電車の中で、体の不自由な方が席を譲ってもらった時や、友達に御礼を伝えたい時などに、謝意を直接伝えることができる「ありがとう」より、「すみません」という言葉を口にするのが普通です。「すみません」は一体伝えたいのが感謝なのか謝罪なのか少し分からない、比較的曖昧で奥深い言葉だとつくづく感じました。このような「すみません」の使い方が日本の文化と日本人の価値観に密接につながっていることが後からわかりました。ある研究によると、相手に手伝ってもらったときにすみませんと言うと、そのすみませんという言葉が手伝う側と手伝われる側に生まれた目に見えない関係を修繕できる機能を発揮させると考えられているそうです。なぜかという、すみませんという言葉には謝罪の意味が含まれており、相手に謙虚な気持ちを伝えることで、お互いの立場が同じになるからです。お互いの関係や社会的地位について気かけつつ、言葉を選んでいるのは、まさに日本の文化や日本人の価値観の表れなのではないかと感じました。

日本人は非常に丁寧な民族だと思われています。なるべく周りの迷惑にならないようにいつも周囲の状況に気を配っています。電車の到着がただ一分遅れただけでも、「お忙しいところ、大変ご迷惑をおかけいたしまして誠に申し訳ございません」と、何回でも繰り返しアナウンスする光景は世界中でも日本のほかになかなか見かけないものです。また、例えば駐車違反で警察署に行った時なども、違法な行為を犯した人に対して、警察官は上から目線で接するのではなくて、親切な口調と丁寧な対応で接します。警察官が「わざわざ時間を割いて、すみません」と何回も言ったりします。その光景も自国ではなかなか見られないことだと思います。日本語を学び始めた頃、特段に力を入れて覚えたのはそういうまるで終わりが無い謝罪の言葉でした。また、丁寧さを重ねるたびに、言葉の長さが長く延びていくことには非常に苦労しました。しかし、言葉の表現によって、日本人の価値観と倫理観を垣間見ることができるようになりました。他人に迷惑をかけてはいけないという教訓を子孫に受け継いでもらうために、外国人にとってはやや堅苦しくややこしい言葉を後世に覚えさせ身につかせるのではないかと思います。そういう他人の立場に立つ思いやりが最終的に日本社会の平和を保ち、守る一つの手法かもしれないと感じました。

最後に、最初の「すみません」という言葉に戻しましょう。電車で席を譲ってもらったり、手伝ってもらったりしたことに対して、日本人は返す言葉を「ありがとう」の代わりに、「すみません」を使います。これは、自分の感謝を相手に伝えると同時に、他人に少しでも迷惑をかけたことをきちんと伝えたいほうがいいと感じているからだと思いました。「常に相手の気持ちを気に留めつつ、赤の他人でも相手の立場になって行動をとる。」これが、日本であふれるほどいつも耳にする「すみません」という言葉の原点なのではないかと思いました。

以上、日本の「すみません」文化について発表させていただきました。ご清聴いただきどうもありがとうございました。